７章　７世紀二つの天皇家論

その１　神武天皇家

7世紀、神武天皇家はどこに実在したか。戦前、神武天皇は九州宮崎から、東征に出発して、広島市、岡山吉備市に立ち寄り、奈良橿原市に都を構えたとされた。戦後、津田左右吉氏は東征を虚構とし、神武天皇家は奈良に自生した権力であると変えた。いずれにしても、神武天皇家は神武以来奈良に存在したとする。どちらも虚構である。
持統天皇以降は奈良に神武天皇家が存在したことは、史跡、史書から確かめることができる。だが、持統即位以前、神武天皇家は奈良にあったのではない。

(1) 「景行紀」の舞台は九州である。「仲哀紀」「神功皇后紀」の舞台も九州である。
　景行が熊襲征伐に向った時の本陣は田川市の白鳥神社である。また神功が遠征軍を解散したのは飯塚市大分である。下関市彦島八幡宮に仲哀天皇の弓掛け松がある。
(2) 縣『風土記』に登場する天皇の足跡は九州である。
(3) 万葉集（1巻・2巻）の歌舞台は全て九州である。

『日本書紀』は6世紀、7世紀の天皇紀を次のように編纂している。

572	585	587	592	628	641	645	654	662
敏達	用明	崇峻	推古	舒明	皇極	孝徳	斉明	空位

これらの帝紀の舞台が奈良（関西）であることは、その記事内容から了解される。だが、これらの天皇は神武から天武に至る天皇家の天皇ではない。天武の在位は６７３年から６８６年であるが、天武紀の舞台は一般に信じられている奈良ではない。先入観を排して読んでみよう。

天武紀の舞台

天武紀は『日本書紀』の中で最も重要な帝紀で、詳細を極める。天武紀に現代と照らし合わせ確実な地名が登場する。「筑紫」である。それまでの帝紀に比べ天武紀では筑紫記事は格段に多い。なぜ、頻出するのか。筑紫記事を取り出して天武紀の舞台を検証してみよう。

①2年冬11月の1日に、金承元罷り帰りぬ。壬申に、高麗の邯子･新羅の薩儒等に筑紫の大郡に饗たまふ。
②４年3月２日に、土佐大神、神刀一口を以て、天皇に進る。14日に、金風那等に筑紫に饗たまふ。
③４年８月２５日に、忠元、礼畢りて歸る。難波より發船す。２８日に、新羅、高麗、二の国の調使に筑紫に饗たまふ。
④６年３月１９日に、新羅の使人清平及び以下客１３人を京に召す。夏、４月11日に、桟田史倉、乗輿を指斤りまつれりといふに坐りて、伊豆島に流す。１４日に、送使珍那等に、筑紫に饗たまふ。即ち筑紫より歸る。
⑤１０年夏４月２日に、広瀬、龍田の神を祭る。３日に、禁式９２条を立つ。･･･１７日に、高麗の客卯問等に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと差有り。
⑥5月11日に、皇祖の御魂を祭る。６月5日に、新羅の客若弼に筑紫に饗たまふ。
⑦11年の春正月９日に、大山上舎人連糠蟲に、小錦下位を授けたまふ。11日に、金忠平に筑紫に饗たまふ。

⑧11年８月1日に、親王より以下及び諸臣に令して、各法式として用いるべき事を申さしむ。３日に、高麗の客に筑紫に饗たまふ。
⑨14年2月４日に、大唐人･百済人･高麗人･併せて百四十七人に爵位を賜ふ。３月14日に、金物儒に筑紫に饗たまふ。即ち、筑紫より帰りぬ。
⑩朱鳥元年４月13日に、新羅の客等に饗たまはむ為に、川原寺の伎楽を筑紫に運べり。
19日に、新羅の進る調、筑紫より貢上る。細馬一匹･騾一頭･犬二狗･鐃金器、及び金･銀･霞錦･綾羅･虎豹皮、及び薬物の類、併て百余種。亦智祥･健勲等が別に献る物、金･銀･霞錦･綾羅･金器･屏風･鞍皮･絹布･薬物の類、各六十余種。別に皇后皇太子及び諸の親王に献る物、各数有り。
⑪5月２４日に、天皇、始めて體不安れたまふ。因りて、川原寺にして、薬師経を説かしむ。宮中に安居せしむ。２９日に、金智等に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと各差有り。即ち、筑紫より退りぬ。
⑫９月４日に、親王より以下、諸臣に連るまで、悉く川原寺に集ひて、天皇の病の為に、誓ひ願ふと云々。９日に、天皇の病、遂に差えずして、正宮に崩りましぬ。11日に、始めて發哭る。則ち殯宮を南庭に起つ。

(1) 「筑紫に饗たまふ」の主語は「天皇」、つまり、天武である。
(2) 「饗たまふ筑紫」は博多に存在した迎賓館である。持統紀では「筑紫館」と書かれている。元西鉄ライオンズ平和台球場があった場所で発掘された。
(3) 天武が奈良に居たとする仮定では時間的に「筑紫に饗たまふ」は不可能である。
③４年８月２５日に、忠元、礼畢りて歸る。難波より發船す。２８日に、新羅、高麗、二の国の調使に筑紫に饗たまふ。
「難波」を大阪とする。天武は８月２５日に「忠元」と会っていた。２８日に「筑紫」で新羅高麗の使者接待は不可能である。
⑦11年の春正月９日に、大山上舎人連糠蟲に、小錦下位を授けたまふ。11日に、金忠平に筑紫に饗たまふ。
1月９日に奈良で冠位を授けたとする。11日に「筑紫」饗応は不可能である。
⑪５月２４日、天武は病になった。その後、回復して、５月２９日には新羅の金智等を筑紫でもてなしている。５月２４日、天武が奈良にいたとする。病になり回復、そして、２９日に「筑紫館」に出向く。これも不可能である。

天武の御所

天武はどこに居たのか。即位後、２年８月２５日の記事がある。

８月２５日に、賀騰極使金承元等、中客より以上二十七人を京に喚す。因りて太宰に命せて、耽羅の使人に詔して曰はく、「天皇、新たに天下を平けて、初めて即位す。是に由りて、唯賀使を除きて、以外は召したまわず。

賀騰極使金承元等を、「京」に喚んでいる。その時、耽羅の使人に天武の命令を伝えたのは太宰府長官である。太宰府長官がそばに控えていたのである。この「京」とは太宰府である。天武紀に登場する「西門」「南門」「宮中」「向小殿」「大殿」「内安殿」「外安殿」「大極殿」「南庭」等は、太宰府である。天武が居た御所は太宰府大極殿である。

7世紀、天武も持統も太宰府に居た。この事実は、後に『日本書紀』を編纂した持統朝の人々は誰でも周知だったし、隠す必要はなかった。『日本書紀』はその事実を隠してはいない。天武が奈良に居たと読み違えているのは近代の日本人である。天武は壬申の乱に勝利した。九州天皇家の皇子として「初めて即位」した。そして、日本国の九州の都であった太宰府に遷り全

国を統治したのである。天武は奈良の地を踏んではいない。

川原寺

朱鳥元年4月13日に、新羅の客等に饗たまはむ為に、川原寺の伎楽を筑紫に運べり。

川原寺の伎楽を「筑紫館」に運んだことを記しているが、この川原寺は奈良川原寺ではない。伎楽を筑紫に運べる距離にあった寺である。

14年9月3日、経を大官大寺・川原寺・飛鳥寺に誦ましむ。

これらの3つの寺、大官大寺・川原寺・飛鳥寺は奈良の寺ではない。

京及び畿内

天武紀には「京及び畿内」と書かれている「京」がある。この京が日本国天皇家の京、奈良藤原京である。「畿内」とは日本国天皇家が統治した近畿である。

3年の春正月の17日に、三野縣主・内蔵衣縫造、二氏に、姓を賜ひ連という。23日に、天皇、東庭に御す。群卿侍へり。時に、能く射ふ人及び侏儒・左右舎人等を召して射はしむ。2月24日に、金主山に筑紫に饗たまふ。28日に、浄廣肆広瀬王・小錦中大伴連安麻呂、及び判官・録事・陰陽師・工匠等を畿内に遣して、都つくるべき地を視占しめたまふ。

「畿内」とは近畿を指す。太宰府に居た天武は、近畿に新しい京を造ろうとしていたことを伝えている。天武は亡くなってこの計画は実現しなかったが、持統の手によって実行に移され、元明の代に完成した。平城京である。

難波朝廷

9月2日に、勅したまはく、「今より以後、跪礼・匍匐礼、並びに止めよ。更に難波朝廷の立礼を用いよ」とのたまふ。

作法を坐礼から、現代的な立礼に改めるとした勅である。当時、立礼を行っていたのは難波（大阪天満）の宮に居た天皇である。「難波朝廷」とは日本国天皇家のことである。

難波

2年9月28日に、金承元等に難波に饗たまふ。

この「難波」は大阪難波（天満）ではない。「難波」とは神武天皇が東征時、「浪が速い」と言った海、関門海峡である。「難波（小倉北区）」には「難波高津宮」があった。「仁徳」天皇の宮である。接待したのはこの大宮であろうか。

万葉集の歌舞台

万葉集も、また、天武が九州に居たことを明らかにしている。万葉集では、天武は「明日香清御原宮」の天皇である。万葉集第一巻、「雑歌」の天皇は、「泊瀬朝倉宮」「高市岡本宮」「明日香川原宮」「後岡本宮」「近江大津宮天皇」「明日香清御原宮」「藤原宮」の天皇であるが、この中で、『日本書紀』帝紀と一致するのは天武と持統だけである。

天武は「明日香清御原宮の天皇」、持統は「藤原宮の天皇」である。「藤原宮」とは九州の宮ではない。持統は奈良に戻って即位した。そして新たに作った宮が「藤原宮」である。「藤原宮」と「藤原京」とは異なる。「藤原京」はすでに存在していた。

(1) 万葉2番歌の「高市岡本宮の天皇」は『日本書紀』舒明天皇ではない。万葉の天皇は有名な「天の香具山」の歌を詠っている。

山常庭　村山有等　取与呂布　天乃香具山　騰立　国見乎為者　国原波
煙立籠　海原波　加万目立多都　拎何国曾　蜻嶋　八間跡能国者

歌は神武天皇家の「ヤマト（山常）」を詠ったものであるが、海が見える「天乃香具山」は香春一の岳である。「海原」は周防灘である。「高市岡本宮」天皇は奈良に居たのではない。「ヤマト」、つまり、香春町（田川市）に居た。だが、『日本書紀』舒明天皇は奈良に居た。

(2) 「泊瀬朝倉宮」の「泊瀬」は「長谷」、「朝倉」は「朝倉市」として名が残る。福岡県秋月にあった天皇の宮である。

(3) 「明日香川原宮」の「飛鳥」も「川原」も天武紀に寺の名前として登場する。確定はできないが、「明日香川原宮」は田川市にあったと思われる。「川原」は河原を意味するが、田川市は英彦山川と中元寺川の川原にある。ここには「川宮」という地名があちこちにある。また、「宮床」「宮川」など、「宮」に関連する地名もある。ここに宮があったことはまちがいないであろう。田川市には「風治八幡宮」という名の神社もある。この神社は天武５年４月４日の記事、「龍田の風神・広瀬の大忌神を祭る」の「風神」を連想させる。

(4) 天武の宮は「明日香清御原」である。「清御原」も、また、河原を意味するであろう。天武が太宰府に移るまで居た宮も田川市にあったと思われる。「飛鳥寺」「川原寺」も田川市にあった寺であろう。

(5) 天武８年の記事に「８年３月７日に、天皇、越智に幸して、後岡本天皇陵を拝みたてまつりたまふ」とある。後岡本宮天皇は天武に近い天皇と思われる。この天皇の代の歌に、「中大兄」の有名なヤマト三山の歌がある。

香具山は　畝火雄々しと　耳梨と　相あらそいき　神代より　斯くにあるらし　古昔も然にあれこそ　うつせみの　嬬をあらそふらしき

中大兄は天武の兄である。香具山、耳梨、畝火とは香春岳である。この三連山の山頂には男神、女神、男神の三神が祭られている。男神二人が真ん中の女神を争ったと伝わる。同じように天武と兄が額田王を巡って争った。「後岡本宮の天皇」の代に中大兄、額田王、中皇命の歌が収められている。万葉編者はこの３人を三山と見なして編集したように見える。
「後岡本宮」天皇は天武とその兄の父であろう。

(6) 「近江大津宮天皇」とは天武の兄である。だが、『日本書紀』天智天皇とは別人である。万葉の「近江」は「淡海」の意味で、小倉南区の干潟の海をいう。「大津」はこの海にあった港である。「近江大津宮天皇」は小倉南区で亡くなり、「山科の鏡山」に埋葬された。この「山科の鏡山」とは香春町の鏡山神社である。

(7) 天武が亡くなった時の「大后（持統）」の挽歌がある。

天皇崩りましし時の大后の御作歌一首

やすみしし　わご大君の　夕されば　見し給ふらし　明けくれば　問ひ給ふらし　神岳の　山の黄葉を　今日もかも　問ひ給はまし　明日もかも　見し賜はまし　その山を　振り放け見つつ　夕されば　あやに悲しみ　明けくれば　うらさび暮らし　荒栲の　衣の袖は　乾る時もなし

６８６年９月９日、天武が亡くなった。皇后持統の哀しみが、山の紅葉がまだかと尋ねる天武の思い出と共に詠われている。持統が詠った「神岳」とは宝満山である。太宰府は風水によって設計された超近代都市だった。風水では東北が鬼門である。鬼門から鬼や悪霊が侵入してくる。太宰府では鬼門に当たる所に宝満山（御笠山）がある。従って、太宰府を造った王朝は宝満山に神社を創祠した。
現在、山頂に竈門神社（上宮）が祀られている。宝満山が太宰府の創建当時から「神の山」だったのである。今でも多くの人が訪れる。
天武が「神岳の紅葉はまだか」と、尋ねた神の山は宝満山である。６８６年9月9日に天武は亡くなった。まだ紅葉は早い。標高８２９ｍの宝満山が紅葉に染まるのはもう少し先だ。

一書に曰はく、天皇崩りましし時の太上天皇の御製歌二首（160･161）

燃ゆる火も　取りて裏みて　袋には　入ると言はずや　面知らなくも
北山に　たなびく雲の　青雲の　星離り行き　月を離りて

北山にたなびく雲、青い雲が星を離れ、月を離れていく。そのように天皇は私のそばを去っていかれた。北山とは原文では「向南山」である。「南を向く山」という表現は「天子は南面する」と同じである。「北山」とは太宰府の北を守る山、四王寺山である。

(8) 日本国天皇の娘、持統は13歳で香春町に居た天武のもとに嫁いだ。少女の感性は異国の季節の移り変わりを見逃さなかった。

春過ぎて　夏来たるらし　白妙の　衣乾したり　天の香具山

「もう夏なのか･･･」九州香春の夏の訪れは奈良より早い。香具山とは香春一の岳である。天武が亡くなり、草壁皇子も亡くなり、持統は奈良に戻り、即位した。持統紀の前半舞台は九州である。後半の即位後の舞台は奈良である。
持統は九州天皇家の皇子たちと共に奈良に遷って行政改革に着手した。全国の行政区名を大きく変更した。九州天皇家の地名を新しく全国的に使用した。香春町の旧「香具山」は現在の奈良明日香「香具山」となった。旧「伊勢（行橋市）」は現在の三重県「伊勢」となった。小倉南区の旧「大津宮」は現在の滋賀県「大津」となった。現在、私たちが知る地名の多くは持統の行政改革によって現代地名となった旧九州天皇家の地名である。『記紀』『万葉集』『縣風土記』を読む際は、地名を九州の旧地名に変換して読まなければならない。

(9) 万葉集「近江」「石見」「大津」
持統遷都によって九州神武天皇家は終焉を迎え歴史から消え去っていく。その九州天皇家への哀悼歌集が万葉集である。
万葉集撰者は九州天皇家の天皇と九州天皇家の地名を意図的に残した。中心歌人である柿本人麻は九州天皇家の歌人であるが、持統奈良遷都には同行していない。そればかりか、持統天皇家から処分を受け、流刑となり、最後は生まれ故郷の「石見国」に流され死んだ。この「石見」とは島根県ではない。「石見」は本来、「岩海」である。小倉南区の海は穏やかな「淡の海」である。対照的にその隣、福岡県苅田町の東海はゴツゴツとした「岩の海」である。ここが人麻の故郷だった。
万葉撰者はまるで九州天皇家を象徴するような生涯を送った人麻を敬愛し、人麻の歌を歌集の主旋律とした。そして、流刑の身となった人麻を「朝臣」の称号で呼んだ。
人麻歌、「近江の荒れたる都」の歌は持統奈良遷都によって荒れ果てた小倉南区、淡海の「大津宮」を悲しみ詠った歌である。この時、人麻は流刑地「讃岐（九州天皇家讃岐･彦島）」から、二度目の流刑地、故郷「石見」（苅田町）への旅の途上だった。
歌は哀愁を帯びる。

近江の荒れたる都を過ぐる時　柿本朝臣人麿の作る歌　29
玉襷　畝傍の山の　橿原の　日知の御代ゆ　あれましし　神のことごと　栂の木の　いやつぎつぎに　天の下　知らしめししを　天にみつ　倭をおきて　あをによし　平山を越え　いかさまに思ほしめせか　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　ささなみの　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　此処と聞けども　大殿は　此処と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

霞が立つのどかな春の日。淡海（小倉南区）の国の九州天皇家の大津の宮。「天皇」とは持統である。「神の尊」とは持統である。持統が草壁皇子を産んだ大津の宮。持統が天下を治めた大津の宮。その持統は奈良（遠の朝庭）に去ってしまった。
大津宮は此処と聞いても、大殿は此処と言っても、春草が生い茂っているだけである。流刑

の我が身と廃墟と化した大津宮が重なる。
人麿、渾身の哀悼歌である。

壬申の乱

天武は壬申の乱に勝利して神武天皇家の天皇として初めて天皇位に就いた。『日本書紀』が伝える通りである。壬申の乱は天武が日本国天皇家を倒した政変であった。
『天武紀上』は壬申の乱の戦記であるが、その戦場は九州である。戦記に登場する「近江」は小倉南区、「倭」は香春町・田川市、「伊勢」は行橋市、「東国」も行橋市、「京」は太宰府、「倭京」は田川市である。そのほか、「美濃」「不破」「吉野」「尾張」「菟田」「伊賀」「鈴鹿」等、関西でなじみの地名が登場するが、全て小倉南区、苅田町、行橋市に存在した古代地名である。神武九州天皇家の地名が現在、私たちが知る地名となったのは持統奈良遷都以降である。
この史実は上記「近江の都」を詠った人麻歌詞ともシンクロする。「畝傍山」は香春岳、「橿原」は神武が宮室建設のために切り開いた香春町高野に付けた地名である。「倭」は香春町・田川市、「淡海の国」は小倉南区である。
『記紀』『万葉集1.2巻』『縣風土記』の地名は一致する。天武紀の地名は福岡県の地名に還元して読まなければならない。

天武が勝利できた理由は4つ考えられる。
(1) 唐、新羅の連合軍と白村江で戦って壊滅した日本国には兵力はほとんどなかった。
(2) 唐の軍が博多に駐留していた。天武は唐軍と手を握った。
(3) 主戦場は小倉南区、田川市である。いわば、天武の地元である。
(4) 『天武紀』で「東国」と呼ばれたのは太宰府の東の国である。現在の苅田町、行橋市である。この地も天武の地元である。ゆえ、豪族たちは天武についた。

日本国天皇家から政権を奪った天武は「明日香清御原宮」で即位した。その後、太宰府に移り、全国を治めた。この時期、全国の税が太宰府に集結した。太宰府の残る記録がそれを物語る。

『日本書紀』は神武天皇家と日本国天皇家の史書

『日本書紀』は神武天皇に始まる天皇家の記録である。神武から持統までの天皇が一系に編纂されているが、神武から武烈までの帝紀の舞台は九州である。
継体から天智までは近畿が舞台である。そして、天武紀は再び九州が舞台である。持統紀は即位前は九州、即位後は近畿である。
『日本書紀』は2つの天皇家(日本国天皇家と神武天皇家)を接ぎ木して編纂された特異な史書である。
だが、なぜ、そのような不自然な史書としたのか。神武から始まる天皇家は天武まで一貫して九州に存在していた。だが、継体紀から天智紀に到る帝紀は日本国天皇家のものである。万葉集編者が記録した天皇によって『日本書紀』を編纂すれば九州天皇家の一貫した帝紀となる。しかし、持統朝はそうはしなかった。日本国天皇家の帝紀を挿入したのである。
そこにはそうしなければならない理由があったと思われる。解く鍵は『持統紀』にある。『日本書紀』は持統で終わる。ここに『日本書紀』の編纂理由が現れている。天武は壬申の乱で日本国天皇「大友王」を斬殺した。当時の人々が「天武が天皇位を簒奪した」と考えたのは当然である。天武が太宰府で全国統治したのは、関西に遷ることを恐れたからであろう。「皇位簒奪」に対し、持統は正史『日本書紀』を編纂することによって答えた。

持統は日本国天皇家の皇女である。天武は九州天皇家の皇子である。日本国天皇家と九州天皇家は宗家と分家の関係にあった。「阿毎(米)」を共通の祖とする。
日本国天皇天智の娘、持統が神武天皇家の大海人皇子の妃となったのは血縁関係だったか

らである。持統から見れば日本国は父の国であり、九州「ヤマト」は夫の国である。彼女の意識の中では同じ天皇家である。
『持統紀』は「私は日本国天皇家から天皇位を簒奪したのではない。私は神武天皇家と日本国天皇家の正統な天皇位継承者だ。」という持統の大義名分を強く主張している。
『日本書紀』を編纂したのは神武天皇家の史官である。日本国天皇家に関する知識も史料もない中での編纂であった。従って、継体紀から天智紀までの日本国の帝紀には編年の誤りや天皇に関する誤記が多い。

(1) 7世紀末まで神武天皇家は九州に存在した。
(2) 神武天皇家は九州北東部(小倉市・小倉南区・行橋市・田川市)等を領土とした。
(3) 天武は壬申の乱に勝利して、神武天皇家として初めて天皇となった。
(4) 天武の死後、持統は奈良に戻った。ここに、近畿天皇家というべき王朝が始まる。
(5) 『日本書紀』は、神武天皇家と日本国天皇家を接ぎ木した史書である。
その舞台は九州と奈良である。

その2　日本国天皇家

『隋書』に我が国の記録がある。「倭国」と国名を書いているが、この国はいかなる国なのか、7世紀の我が国の歴史を知るために、『隋書』を読んでみよう。『隋書』は『日本書紀』にはない史実を記録している。

・開皇二十年倭王姓阿每字多利思北孤號阿輩雞彌
　国名は「倭国」、王の名は「阿每」である。
・遣使詣闕
　倭国は、600年に、遣隋使を派遣した。
・使言倭王以天為兄以日為弟天未明時出聽政跏趺坐日出便停理務云委我弟
　倭王は云う「天をもって兄とし、日をもって弟とする」。
・王妻號雞彌後宮有女六七百人
　「阿每」の妻は「雞彌」という。後宮には女官が6～700人居た。
・名太子為利歌彌多弗利
　太子の名は、「利歌彌多弗利」である。
・内官有十二等一曰大德次小德次大仁次小仁次大義次小義次大禮次小禮次大智次小智次大信次小信員無定數有軍尼一百二十人
　内官十二等がある。
・敬佛法於百濟求得佛經始有文字
　仏法を導入、敬っている。百済と親交があり、仏典を得ている。
・新羅百濟皆以倭為大國多珎物並敬仰之恒通使往來
　新羅、百済は「倭国」を大国として見ている。「倭国」を敬仰し、通使が往来している。
・大業三年其王多利思北孤遣使朝貢
　607年、「倭国」王が朝貢してきた。
・使者曰聞海西菩薩天子重興佛法故遣朝拜兼沙門數十人來學佛法
　使者は煬帝を、仏教の世界観に立って「海西菩薩天子」と言った。
・其國書曰日出處天子致書日没處天子無恙云云
　「日出る處」とは東。関西の国である。
・帝覧之不悦謂鴻臚卿曰蠻夷書有無禮者勿復以聞

「日出る處天子」の「天子」は、皇帝の意ではなく、「菩薩天子」の意で使っている。「海西の菩薩天子」である煬帝に対して、自身は「海東の菩薩天子」と仏教観に基づいた用語を使っている。煬帝は取り違えている。煬帝の不機嫌は当たらない。

・明年上遣文林郎裴清使於倭国度百濟行至竹島南望聃羅國經都斯麻國迴在大海中又東至一支國又至竹斯國又東至秦王國其人同於華夏以為夷洲疑不能明也又經十餘國達於海岸自竹斯國以東皆附庸於倭

608年、隋の使者、文林郎裴清が「倭国」に来た。その航路が示されている。「竹斯国」は博多である。博多を過ぎ、東進して「秦王國（不詳）」を過ぎ、「十餘國」を経て港に到着した。ここは大阪天満である。なお、『日本書紀』は唐から裴世清が来たと書いているが誤記である。608年は隋である。神武天皇家書記官の誤謬である。「倭国」は関西である。

・

倭王遣小徳阿輩臺従數百人設儀仗鳴鼓角來迎後十日又遣大禮哥多毗従二百餘騎郊勞既至彼都

「彼都」とは飛鳥の都である。裴清は、天満ー天王寺ー藤井寺ー太子町ー飛鳥と竹内街道を進んで都に入ったと思われる。

『百済本記』には「日本の天皇、太子、皇子」の死亡記事がある。

太歳辛亥の3月に、軍進みて安羅に至りて、乞屯城を営る。是の月に、高麗、其の王安を殺す。又聞く、日本の天皇及び太子・皇子、倶に崩薨りましぬといへり。

日本国の天皇、皇太子、皇子が死んだという大事件である。この記事は『推古紀』にはない。持統天皇家の書記官は知らなかったのである。

『隋書』「阿毎」

『隋書』の「倭国」とは7世紀奈良に都をおいた国である。その国名は『百済本紀』の「日本国」、或いは『旧唐書』の「日本国」として知られている。その王は「阿毎」と名乗った男王で、『隋書』はその王の姿を記録している。

(1) 遣使詣闕 ⇒ 600年、遣隋使を派遣。
(2) 倭王以天為兄以日為弟 ⇒ 王である。
(3) 王妻號雞彌後宮有女六七百人 ⇒ 王には妻がいる。
(4) 敬佛法 ⇒ 仏教徒である。
(5) 其國書曰日出處天子 ⇒ 「日が昇る所」は東の国、奈良である。
(6) 大業三年其王多利思北孤遣使朝貢 ⇒ 607年王多利思北孤が遣隋使。
(7) 明年上遣文林郎裴清使於倭国 ⇒ 608年、隋使文林郎裴清が倭国に来た。

「倭国」への航路は東、瀬戸内海東進である。その国が奈良であることは明らかである。奈良の国は「日本国」と呼ばれているが、この「日本国王」を巡っては二つの解釈がある。最も一般的な解釈は神武天皇家と理解するものである。もう一つは古田武彦氏が提唱する「九州王朝」だというものである。だが、どちらも真実ではない。

(1)『記紀』の天皇は推古帝である。だが、倭国王「阿毎」は明らかに男性である。
(2)「阿毎」の国は瀬戸内海を東進した奈良である。九州ではない。

『隋書』の「倭国」は「推古」の神武天皇家ではない。この国の王は男性である。名は「阿毎」である。では、古田氏が提唱する「九州王朝」の王と言えるか。「倭国」の位置は明らかに奈良である。「九州王朝の史実を神武天皇家が盗用したのだ」という氏の主張には根拠がない。
果たして、『隋書』「倭王阿毎」とは何者なのか。この王の奈良実在証拠はあるのか。

法隆寺釈迦三尊光背銘に記録された天皇がいる。銘文は仏教世界観に基づく堂々たる漢文である。

法隆寺金堂釈迦三尊像(『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』同朋社刊より)

法興元三一年歳次辛巳十二月鬼前太后崩
明年正月二二日上宮法皇枕病弗愈
干食王后仍以勞疾並著於床
時王后王子等及與諸臣深懐愁毒共相發願
仰依三寶當造釈迦像尺寸王身
蒙此願力轉病延壽安住世間
若是定業以背世者往登浄土早昇妙果
二月二一日癸酉王后即世翌日法皇登遐
癸未年三月中如願敬造釈迦尊像并侠侍及荘厳具竟
乗斯微福信道知識現在安穏出生入死随奉三主紹隆三寶遂共彼岸普遍六道法界含識得脱苦縁同趣菩提
使司馬鞍首止利佛師造

意訳してみよう。内容は切々たる延命、往生の誓願である。

* 法興の元(はじめ)より三十一年(621)、歳次未巳十二月、鬼前(神前)太后崩ず。
* 明年(622)正月二十二日、上宮法皇、病に枕して、愈(こころよ)からず。
* 干食し(食べ物を受け付けず)、王后、仍(よ)りて以て勞疾し、並びに、床に著く。
* 時に王后、王子等、及び諸臣、深く愁毒(しゅうどく)を懐(いだ)き、共に相発願す。
* 三宝を仰ぎ依りて、當に尺寸王身(しゃくすんおうしん)の釈迦像を造るべし。
* 此の願力(がんりき)を蒙(こうむ)り、病を転じ、寿(よわい)を延べ、世間に安住せんことを。
* 若(も)し是れ定業(じょうごう・前世からの定め)にして、以て世に背かば、往きて浄土に登り、早く妙果(みょうか・悟り)に昇らんことを。
* 二月二一日、癸酉、王后即世す。翌日法皇、登遐す。
* 癸未年(623)、三月中(に)、願の如く、釈迦尊像并(なら)びに侠侍及び荘厳の具(光背と台座)を敬造し竟(おわ)りぬ。
* 斯(こ)の微福(みふく)に乗(よ)り、信道の知識(道を信じる施主)、現在には安穏にして、生を出でて死に入らば三主(鬼前太后・上宮法皇・王后)に随ひ奉り、三寶を紹隆(しょうりゅう)し、共に彼岸を遂げ、六道に普遍(輪廻)する法界(宇宙)の含識(衆生・人々)も、苦縁を脱するを得て、同じく菩提に趣かん。　使司馬・鞍首止利佛師、造る。

「法興」は元号である

「法興」とは元号である。「法興」年間とは591年 ~ 622年である。『推古紀』とほぼ重なるが、法興を定めた「上宮法皇」とは「推古」ではない。神武天皇家で元号を初めて定めた天皇は天武帝である。従って、５９１年に推古帝が元号を定めることはない。故に「法興は私元号」と解釈されることになるが、「法興」は「上宮法皇」が定めた正式の元号である。伊豫風土記にも記録に残る。

伊豫風土記に法興の天皇の行幸の記録があり、「伊豫の湯(道後温泉)」にその時の碑文が残されている。碑文には、「法興六年十月、歳丙辰」とある。ここにも元号「法興」が現れる。

飛鳥「法興寺」

「法興」を寺号とした寺も存在した。「法興寺」である。「法興」とは「仏法を興す」という意味

で、物部氏と戦い、仏教導入を果たした上宮法皇の世を意味する。
『日本書紀』は丈六の銅･繡の丈六の仏像をそれぞれ一体造ったことを伝え、その時、高句麗の「大興王」が「日本国の天皇、仏像を造りたまふと聞きて、黄金三百両を貢上る」と記録している。この「日本国天皇」とは「上宮法皇」である。「法皇」は仏教に帰依した天皇を意味するから、現世では「上宮天皇」である。
この仏像が「法興寺」の寺地に建つ飛鳥安居院の釈迦仏である。金銅丈六釈迦像啓造は国家の大事業であった。「法興寺」は蘇我氏の氏寺といわれるが、そうではない。蘇我氏はこの寺を作る棟梁だった。

「法興寺」は日本国の上宮天皇の「法興」の代に、「仏法を興す」ことを祈願して、施主上宮天皇、棟梁蘇我氏によって建立された国立の大寺院である。法興寺は昭和にその遺構が発掘調査され、初めて高句麗様式の寺だったことが分かった。
飛鳥安居院に鎮座する金銅丈六釈迦像は一度もその台座から動いたことはないと伝わる。では、高句麗様式の堂々たる伽藍の北金堂、西金堂、東金堂、五重塔は一体どうなったのであろうか、『日本書紀』にもその説明はない。法隆寺若草伽藍のように焼失したのではないことは明らかである。どのような運命をたどったのであろうか。これほどの大寺院である。建造記録は残っているにも関わらず、消失記録は見当たらない。
記録はないが、その後を追えないことはない。持統奈良遷都後に法興寺は別の場所に移築されたのである。その事情は不詳である。何らかの事情で、恐らく、持統の意思であると思われる。

持統朝の新しい神は三重県伊勢市に創祀された「伊勢神宮･天照大神」である。「天照」は神武天皇家始祖神である。持統は日本全国を統治する初めての女性天皇である。持統は自らを「天照」と重ねたのであろうか。持統は奈良、大阪、兵庫の人々から敬愛された日本国「上宮天皇」が建立した仏教寺院法興寺の存在を許さなかった。こうして、法興寺は解体され、北金堂と五重塔は移築された。その姿を私たちは見ることができる。法隆寺である。

法隆寺の伽藍配置が通常ありえない配置であることは、四天王寺の伽藍配置を参照すればすぐに了解できよう。中門-五重塔-金堂-講堂が当時の世界基準の伽藍配置である。門をくぐり、仏舎利を納めた塔に参拝し、次に、金堂の本尊に参拝する順路となる。事実、焼失した元の法隆寺（若草伽藍）はその様な伽藍配置である。だが、現法隆寺は中門を入ると、左に塔、右に金堂がある。参拝者の視線は講堂に向かうことになる。移築された時の何らかの事情によってこのような不自然な配置となったのである。故、今、西の回廊から入り、塔、金堂と参拝する順路としている。いわゆる「法隆寺の七不思議」は、移築の時に生じたものである。そうでなければ、五重塔の天辺に鎌が残されるようなことがありえようか。

『推古紀』の天皇は「上宮天皇」

『日本書紀』では、592年～628年は推古天皇の代である。この代は「法興」とほぼ重なる。『推古紀』に「上宮太子」の記事がある。

推古二十九年、是の月に、上宮太子を磯長陵に葬る。

この記事は正確とは言えない。「葬った」のは一人ではない。621年12月に神前太后、622年2月に王后、翌日に上宮法皇と亡くなり、三体が大阪府太子町叡福寺磯長陵に埋葬された。明治の調査で三体、並んで埋葬されていることが明らかになっている。法隆寺釈迦三尊後背の記録と一致する。推古29年の「上宮太子」の陵は太子町磯長陵である。「上宮太子」は法隆寺釈迦三尊後背銘銘の「上宮法皇」と同一人物である。

通常、『推古紀』の「天皇は推古、皇太子は聖徳太子」と読まれている。「上宮太子は聖徳太

子で、皇太子」とした場合、その妻を「王后」、母を「太后」、子を「王子」とは言わない。ところが、磯長陵に埋葬された「上宮法皇」の妻は「王后」、母は「太后」とされている。
『推古紀』の「上宮太子」は「上宮法皇」と同一人物であるから、「上宮太子」は「皇太子」ではなく、「天皇」である。このように理解されるべきである。
『日本書紀』編者は「上宮太子が磯長陵に埋葬された」と記録を残し、図らずも、「上宮太子は上宮法皇である」ことを明らかにした。「上宮法皇」は日本国天皇である。無論、編者は「上宮太子は日本国天皇である」とはどこを探しても書いていない。だが、「天皇とは推古天皇である」とも明記していない。ただ、「天皇」と書いているだけである。

『推古紀』の「天皇」とは誰なのか？候補は二人である。一人は「推古天皇」、もう一人は「上宮天皇」である。改めて読み直してみよう。

> 推古十三年の夏四月の辛酉の一日に、天皇、皇太子・大臣及び諸王・諸臣に詔して、共に同じく誓願ふことを発てて、始めて銅・繡の丈六の仏像、各一体を造る。

この記事は、高句麗の大興王が「日本国の天皇、仏像を造りたまふと聞きて黄金三百両を貢上る」という記録と一致する。「天皇」とは大興王が「日本国天皇」と呼んだその人である。「日本国天皇」は「始めて銅・繡の丈六の仏像」を造った。「銅の丈六の仏像」とは、法興寺の本尊金銅丈六釈迦像のことである。法興寺を建立した「法興の天皇」とは「上宮法皇」である。
「推古十三年の天皇」とは、622年に亡くなり、磯長陵に母、妻と共に埋葬された「上宮法皇」である。
「天皇」は「上宮天皇」、「皇太子」は「上宮天皇」の子、山代王である。「大臣」は蘇我馬子である。

> 推古十四年秋七月に、天皇、皇太子を請(ま)せて、勝鬘経を講かしめたまふ。三日に説き竟へつ。是歳、皇太子、亦法華経を岡本宮に講く。天皇、大きに喜びて、播磨國の水田百町を皇太子に施りたまふ。因りて斑鳩寺に納れたまふ。

この「天皇」も「上宮天皇」、「皇太子」は「山代王」である。皇太子山代王が勝鬘経を説いたのである。それを上宮天皇が大いに喜んだのである。
『日本書紀』は上宮太子の命日を2月5日とするが、誤記である。命日は2月22日である。叡福寺、四天王寺は旧歴2月22日に法要を行う。『日本書紀』編者はこの事実も知らなかったのである。

591年～622年の日本国天皇は「上宮天皇」である。『隋書』「倭王阿毎」とは「上宮天皇」である。「上宮天皇」は何故、隋への国書に「阿毎」と自署したのであろうか。「日本国」天皇家の遠祖は「松野連姫氏系図」の第九代の王、「阿米」である。この名を代々受け継ぎ、隋への国書に「阿毎」と自署名したと思われる。
『推古紀』に登場する「天皇」は622年までは「上宮天皇」、その後は即位した「山代天皇」である。
「上宮天皇」の説話は関西各所に残っているが、「推古」の逸話は皆無である。
大阪太子橋の旧家田嶋家に上宮天皇の絵図が残っている。上宮天皇はこの旧家を度々訪れたと言われ、絵図には上宮天皇、皇太子、重臣蘇我馬子、小野妹子が描かれている。
『推古紀』は『上宮天皇紀』として読まれるべきである。

持統天皇家は「上宮天皇」の「天皇」としての足跡を消し去ってしまってきた。「天皇」の足跡は「推古」という架空の天皇のものにされてしまっている。歴史から抹殺しようと図ったが、この国の人々はこの偉大な天皇を忘れる事はなかった。死後しばらくして人々の間に「聖徳太子信

仰」が沸き起る。日本に初めて仏教を導入して、仏教理念によって国家建設を進めたその誠、その才は今日まで伝えられてきた。だが、何故、持統天皇家は「上宮天皇」を消し去ろうとしたのか。大きな謎である。

7世紀の日本国天皇

7世紀、飛鳥を都として日本全国を統治した政治権力は「日本国」天皇家である。九州太宰府も「日本国」天皇家の京であった。
日本国天皇家の史書は残されていないが、幾つかの史料はある。「法隆寺釈迦三尊光背銘」「船氏王後墓誌」「大安寺資材帳縁起」「野中寺銅造弥勒菩薩半跏思惟像本像台座框」である。そこには、『日本書紀』とは異なる天皇の名が記されている。

法隆寺釈迦三尊光背銘‥‥上宮法皇（上宮天皇）
船氏王後墓誌‥‥‥‥‥‥‥乎娑陀天皇・等由羅天皇・阿須迦天皇
大安寺資材帳縁起‥‥‥‥‥‥袁智天皇
野中寺銅造弥勒菩薩半跏思惟像本像台座框‥‥‥‥中宮天皇

これらの天皇名が当時の実際の天皇名である。
野中寺銅造弥勒菩薩の台座框には「中宮天皇」と書かれている。この弥勒菩薩は岡山総社市、賀陽氏の氏寺が病気回復祈願として贈ったものである。白村江で唐との戦いに敗れ、心労に倒れた日本国天皇「中宮天皇」をいたわっている。
「中宮」とは宮の名前である。羽曳野市の野中寺は「中の太子」、八尾市の大聖勝軍寺は「下の太子」、太子町の叡福寺は「上の太子」と呼ばれている。「中宮」とは野中寺、「上宮」とは叡福寺を指す。野中寺は現在は寺であるが、元々「中宮」と呼ばれた宮だったのではないだろうか。「中宮天皇」はここに居た。よって「中宮天皇」と呼ばれた。同じように、叡福寺は元々は「上宮」と呼ばれる宮だった。「上宮天皇」はそこに居た。よって「上宮天皇」と呼ばれた。

「中宮天皇」が『日本書紀』の「天智天皇」に当たる。「天智」は諡名であるが、この諡は大安寺資材帳縁起に表れる「袁智」を元に作ったものであろう。「中宮天皇」は「袁智天皇」とも呼ばれていた。帝紀を編んでみよう。

西暦	591	622	643	650	672
元号		法興		大化　白雉	
天皇	乎娑陀天皇	上宮天皇 等由羅天皇	山代王 阿須迦天皇	中宮天皇 袁智天皇	大友王

日本国天皇家では「乎娑陀」から5代、男性の天皇が続く。「上宮天皇」の子、「山代王」は即位して「阿須迦天皇」と呼ばれ、外戚蘇我氏によって滅ぼされた。643年、蘇我氏を滅ぼし、「大化の改新」を行ったのが「中宮天皇」である。663年、百済救援のため唐・新羅との決戦に臨み、敗戦後、太宰府に赴き、唐との交渉に当たり、672年に亡くなった。その後、即位したのが「大友天皇」である。大海人皇子による壬申の乱、小倉南区での戦闘で敗れ、斬殺された。

日本国天皇家はここに終わる。
この激動の時代を、『日本書紀』編者はどう編年しているか。

572	585	587	592	628	641	645	654	662
敏達	用明	崇峻	推古	舒明	皇極	孝德	斉明	空位

「推古」は架空である。「皇極」も架空である。「皇極」が「斉明」として再登場するのも架空である。「斉明」の後の7年間空位も架空である。668年に「天智」即位とするとするが、在位はわずか4年としている。『日本書紀』はいかにも拵えた帝紀である。

(1) 7世紀末まで奈良に実在した天皇家は「日本国」天皇家である。その最も有名な天皇が「上宮天皇」である。世に聖徳太子と呼ばれている天皇である。このとき、神武天皇家は九州の北東部(小倉南区・行橋市・香春町・彦島等)にいた。
(2) 日本国天皇家と神武天皇家の遠祖は「阿米」、紀元前350年頃の王である。
(3) 「阿米」は九州から奈良に到り、国を作った。纒向遺跡はこの王家のものであろう。
(4) 『日本書紀』は神武天皇家と日本国天皇家の二つの歴史が複合されて編纂された史書である。7世紀の『推古紀』『天智紀』の天皇は奈良に都を置いた「日本国」の天皇である。神武天皇家ではない。
(5) 『天武紀』は九州天皇家天武の治世記録である。壬申の乱に勝利して神武天皇家として初めて皇位に昇り、太宰府を首都として全国を統治した。
(6) 天武亡き後、持統天皇は九州天皇家一族と共に奈良に遷都した。神武天皇家が奈良に存在することになったのは持統からである。

＜7世紀の「倭国」「日本国天皇家」「神武天皇家」＞

7世紀は古代日本の大変革の時代だった。その原因を作ったのは唐である。唐は結果的に日本の二つの国を滅ぼした。「山結」と「日本国」である。結果、生き残ったのが、神武を始祖とする九州天皇家大海人皇子だった。

(1) 7世紀末に日本のほぼ全国を統治したのは奈良(藤原京)を都とした日本国天皇家だった。
(2) 九州西部には熊本市中央区を首都とした連邦国家「山結」が存在した。
(3) 九州北東部(小倉・小倉南区・行橋・田川)が神武天皇家の統治領であった。
(4) 663年、日本国天皇家は白村江で唐・新羅連合軍と戦い、大敗する。
(5) 日本国と共に戦った「山結」も大敗、「山結」の王が捕虜となる事態となった。
(6) この戦いに九州天皇家大海人皇子は参戦しなかった。「吉野山に隠り、天皇の病気回復を祈願する」と逃れた、と『天武紀』は伝える。
(7) 672年1月、日本国天皇「天智」が亡くなる。7月、大海人皇子は吉野山を脱出し、伊勢(行橋市)で蜂起する。大海人皇子は唐との戦後外交のため太宰府に来ていた日本国天皇大友王と戦い、小倉南区「瀬田」の最終戦に勝利する。大海人皇子は香春町「飛鳥浄御原宮」で即位。その後、京、太宰府に移って全国を統治した。天武の死後、持統が政権を継承した。
(8) 持統は唐の武則天を師とし、天武の死後、自ら天皇になることを決意したと思われる。
持統は草壁皇子の死後、九州を去り、父の国、日本国に戻って即位した。その宮は「藤原宮」と言われる。持統が作った京は「藤原京」ではない。「藤原京」はすでに存在した。持統の京は「平城京」である。その完成は元明天皇の時代である。
(9) 歴史の転換点に立ち、国政、行政、宗教改革をすすめ、現代日本につながる国家の骨組みを作った天皇は持統である。

以後、この近畿天皇家が日本を支配した。